

令和 2年 9月 10日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980291

氏名

李東宣

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先：都市名 オックスフォード (国名 英国)
2. 研究課題名（和文）：イギリス王党派における権利と自由
3. 派遣期間：平成・令和 1年 10月 5日 ～ 平成・令和 2年 8月 31日 (331日間)
4. 受入機関名・部局名：オックスフォード大学 歴史学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本課題の目標は、近年高まっている17世紀英国史研究再考の潮流の中で、議会派・ピューリタン研究への偏重を是正し、政治的王党派や国教会聖職者が当時の思想空間で果たした役割を明らかにすることであった。この目標に沿って、派遣先では17世紀王党派と国教会聖職者思想研究を牽引しているサラ・モーティマー氏から助言を受けつつ、オックスフォード大学ボドリアン図書館・クイーンズカレッジ図書館・クライストチャーチ図書館に所蔵された史料を収集し、読解する作業を行った。

この作業の成果として、これまではぼ手付かずの状態にあった17世紀半ばの王党派・国教会聖職者が関わった一連の論争の内容が明らかとなった。この論争で扱われている論点は多岐にわたるが、どれもその基底には先鋭に対立する自然法概念がある。特に1649年から1660年まで、王政と国教会体制が崩壊した空位期において、自然法は拠り所を失った王党派と国教会聖職者にとって一層重要な概念装置であったと推測される。

以上の成果をもとに、雑誌論文2本分に相当する原稿を英語で書き上げることができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本派遣で得られた一連の成果は3度に渡る派遣先のセミナーにて口頭発表した。口頭発表の場および現地で築いた研究コミュニティから得たコメントをもとに、1年以内に日本国内および英語圏の学術雑誌に発表できる論文の形に整えていく予定である。より長期的には、2章分ほどの分量として博士論文に取り込む予定である。

今後よりインパクトのある成果に仕上げるためには、膨大な蓄積のある17世紀イギリス革命史研究と思想史研究の文脈の中に位置付ける必要があると考える。本研究が対象としている王党派・国教会聖職者の視点を取り込んだとき、これまでのナラティブがどう変わるかという問いに答えなければならない。

現時点での見通しとしては、先行研究を刷新する以下2つの主張が可能である。まず、先行研究において急進的革命派に結び付けられてきた自然法概念が彼らの専有物ではなく、彼らと政治的・宗教的に対立した国教会聖職者にとっても肝心なものであったこと。また、これまで反革命派と一括りにされてきた空位期の国教会聖職者内部に亀裂があり、その意見の差に思想的豊かさが見受けられるという点である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本派遣によって、まず個人的次元において、念願の史料群と向き合うことができ、大いに研究を進めることができた。史料を探し読解する過程で、文書館通いにも慣れ、史料の土地勘も掴めた。

個人的次元の研究成果に加え、研究関心を共にする様々な年代の研究者とのつながりを築くことができた。受け入れ教官のモーティマー氏の積極的な紹介の甲斐もあり、同年代の研究者との面識を得、多方面からの知的刺激を得ることができた。

本派遣による最も貴重な成果は、英国史という、非英語圏出身者が自信を抱きにくい分野において、被派遣者の研究が意味を持つという自信を得たことである。受け入れ教官のモーティマー氏から他の（英国出身の）受け入れ学生と変わらない鞭撻を受ける過程で、最初はやや不安な目つきでこちらを見ていた研究集団も、本被派遣者を同等な英国史研究者として近づいてくるようになった。英国、特にオックスフォードにて研究の層が非常に厚い当分野において、他国出身の一大学院生がほぼ手付かずの史料を読み解き、同じ研究集団の一員として議論する経験は、今後研究を続けるにあたって、第一線で研究していくという強い動機を保たせるものと感じている。